

Title	J. S. デューゼンベリ, G. フロム, L. R. クライン, E. クー編 ブルッキングス・モデル (第3部) : 若干の追加研究報告
Sub Title	The Brookings model : some further results, edited by J. S. Duesenberry, G. Fromm, L. R. Klein and E. Kuh, London, 1969
Author	鳥居, 泰彦
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.12 (1969. 12) ,p.1290(78)- 1292(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19691201-0078
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19691201-0078">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19691201-0078</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

味をもつのであろうか。

本書は、諸学説の検討を通じて、帝国主義論を世界資本主義という独自の対象の措定から出発すべきことをあきらかにしている。その方法として、上向法的な展開を志向しながらも、したがって、理論的・体系的な展開を目指しながらも、『資本論』体系のごとく原理的な厳密な法則展開とはしがたいという共通な認識に達しているように考えられる。この点では、本書の構成に大きな影響を与えていると思われる前掲佐藤金三郎氏の所説を一步すすめるものと評価したい。しかし、帝国主義論が理論的性格をもつ以上、論理の問題はおろそかにできるものではない。帝国主義論が、〈傾向的性格〉をもつ理由を、明確に示す必要は依然として残っているとみたい。

そこで、方法構築の意義を考えると、それは帝国主義論が、資本主義の段階的転化の認識を根底に据えるべきものであるという視点と、帝国主義論が一個の理論的性格をもたねばならぬという視点との対抗的関係をいかに統一してゆくかというアポリアを解くことにあるということなのではなかろうか。そして、このアポリアを打開してゆく方法は、既成の「生産」「流通」といった視点を護持することによって果しうるものではなく、世界資本主義における競争関係の把握という独自の問題領域を設定する必要がある。一国的再生産過程は、これによって世界的な再生産構造の一環として存立しうることを解明しうることになるであろう。(1969年3月刊・A5・264頁・360円)

飯田 裕 康

J. S. デューゼンベリ, G. フロム  
L. R. クライン, E. クー 編

『ブルッキングス・モデル』(第3部)

—若干の追加研究報告—

The Brookings Model: Some Further Results,  
edited by J. S. Duesenberry, G. Fromm, L. R.  
Klein and E. Kuh, North-Holland Publishing  
Company, Amsterdam, London, 1969, pp. 519.

1.

戦後、アメリカ合衆国の経済を記述する経済モデル

が、つぎつぎと作られた。L. R. Klein を中心とするポスト・ケインジアンの人々がエコノメトリック・モデルを実際につくって動かしてみせた功績は非常に大きい。アメリカ合衆国の経済に関する Klein モデルあるいは Klein-Goldberger モデルは既に読者になじみ深い筈である。その後、この種のエコノメトリック・モデルは、イギリス、日本をはじめ沢山の国の経済について作製された。

この種の一連のエコノメトリック・モデルの特徴は、原理的にはケインズがマクロの経済現象に関して示した均衡原理を用いているところにある。ケインズ理論の特質の一つは消費函数の概念の用い方に象徴的にあらわれているように、新古典派的なミクロ経済主体の均衡理論の世界で解き明かされている理論を、マクロ経済の記述説明の道具として使ってみせていることである。長い間、この前提は、当然のこととしてポスト・ケインジアン経済学の支柱となって来た。しかしながら、ミクロの世界で確立されたことはそのままマクロの世界の真理であると考えこと自体、本当は必ずしも正しくない。個人にとっては所得のうちの消費し残した部分が貯蓄であっても、経済全体としての貯蓄が投資に一致するときめてかかることには疑問がある。今までは国民所得勘定のデータをそのように(貯蓄と投資が均等するように)作成していたからよいようなもの、もし消費者主体均衡の図式の中に将来財とその価格の概念を導入すれば、従来の勘定体系はもはやわれわれが分析の対象とするデータたり得なくなってしまう。同じように、仮りにミクロの世界で企業主体の投資行動を説明する理論図式を用意しても、それをそのままマクロの世界の投資決定方程式として用いることは誤りのようである。なぜならば、個々の企業主体の投資決意と、投資決意をしてから投資行為が完了するまでの時間は一律でなく、かなり広い分布を持って居り、マクロの投資量とはこうした分布の時間的な推移を各時点で切断してみている大きさだからである。

このように、新古典派的なミクロの理論が示し得る帰結をマクロの理論の世界に援用することは決して単純な合計操作を加えることではない。ポスト・ケインジアンマクロ理論が持っていたこの錯覚は、いわゆる集計理論(aggregation theory)の分野で基礎的な検討を加えられて来たり、また一方では新古典派総合(Neoclassical synthesis)の問題として考えられている。

2.

この問題に真正面からとり組んで、ミクロの主体均衡分析とその集計過程の分析をへてマクロの経済モデルを組み上げるという大作業を行なった人々がいた。いわゆる Brookings Model の作製者達である。この大計画は、はじめ Social Science Research Council の資金で1961年に発足して、1963年からは National Science Foundation の資金で Brookings Institution を中心に多くの大学から優れた研究者が参加して続けられた。生産・投資に関しては D. W. Jorgenson, R. Eisner, P. Darling, M. C. Lovell, M. Dutta が、消費者均衡については S. J. Maisel, G. R. Sparks, J. S. Duesenberry 等が、所得分布、賃金雇用の決定に関しては E. Kuh, C. L. Schultze, J. L. Tryon, S. Lebergott 等が参加した。その他、外国貿易、農業、金融財政等の問題を R. R. Rhombert, L. Boissonneault, K. A. Fox, F. D. Leeuw, A. Ando, E. C. Brown, E. W. Adams 等が担当し、推計問題と集計問題については L. R. Klein, F. M. Fisher, C. C. Holt, Y. Shinkai, R. Hall 等が参加した。

この研究作業は初め Variable system と称して各ブロックの分析を独自に進めたので、モデル全体としての consistency が保たれるかどうか懸念されたのであったが、最終的には200本の方程式からなる巨大なモデルの identifiable な同時推定に成功したのであった。このまさに big science と呼ぶにふさわしい企ては、副産物として巨大なデータ・バンクを残した。このデータ・バンクは世界的にデータ・バンクの重要性についての認識を高めると同時にデータ・バンクの一つの典型を示したという意味で高く評価すべきである。

この大作業の成果は、既に下記の2冊の書物として刊行されている。

- (1) The Brookings Quarterly Econometric Model of the United States, edited by J. S. Duesenberry, G. Fromm, L. R. Klein, E. Kuh, North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 1965, 790 pages.
- (2) Policy Simulations with an Econometric Model, edited by G. Fromm, P. Taubman, North-Holland Publishing Company, 1968, 195 pages.

このようにして作製された巨大な Brookings Model は、よくあるように作り置きで放置されているのではなく、継続的に検討と改良を加え続けているところ

にもう一つの特徴がある。最近ではモデルの各部分のスペシフィケーションに根本的な改善を施すために、1968年3月にこの研究計画の新旧スタッフが会議を開いて、研究の作業方針を討議した。そこで打ち出されたものは、最近のアメリカ合衆国の国際収支バランスの構造的な悪化の傾向を反映して、財政、金融等の部分の改善と、従来8部門であった部門分割を35部門に増やす構想とを含む大幅な改善であった。この構想によると従来200本の方程式からなっていたこのモデルは一挙に約1000本の方程式を含むもっと巨大なものになる。しかし、200本の方程式のモデルを作製し、推定し、動かす過程で彼等が蓄積した経済理論と推定理論と推定の為の計算テクニックおよび計算プログラムに鑑みて、このグループの人々は充分の自信を持っているようにみえる。

3.

前置きが長くなったが、ここに紹介する The Brookings Model: Some Further Results はこの巨大な、そして優れて継続性のある研究プロジェクトのプロGRESS・レポートである。この大計画をその発足当時から押し進めて来た中心的な指導者の一人である Edwin Kuh が第I章で梗概を述べている。第II章から第V章は消費支出、所得分布、財政、金融に関して従来のモデル(BUSEM 1965として知られるブルッキングス・モデル)の弱点を補う為の研究を収録している。第VI章と第VII章では、L. R. Klein, G. Fromm, A. L. Nagar の三人が再びこの巨大なモデルの解法とシミュレーションについて報告している。以下、収録されている個々の論文を一つずつ見て行こう。

第II章では M. C. Lovell が百貨店の販売、在庫、発注の行動を分析している。7店の代表的百貨店のデータを用いて在庫量、発注残高、費用、新規発注高等の決定方程式を一組の同時定差方程式系として測定している。この分析がそのまま Brookings Model の中に組み込めるとは思えないが、適当なアグリゲーションをへて小売・百貨店部門のサブブロックが完成するであろう。

現代アメリカ経済の特徴の一つである耐久消費財の消費者金融(割賦販売)の事象は、従来の Brookings Model の中でも自動車をはじめ5種類の方程式で説明されていた。M. K. Evans と A. Kisselgoff はこの部分の再推計を行なっている。同時に分析の対象を広げて消費者金融市場方程式は全部で17本となった。従

来から自動車購入の消費者金融方程式については、可処分所得の効果がはっきりと測られているのに反して自動車保有台数と支払い額の中の割賦金の割合との間のコリニアリティのために思うような推定ができないという困難があったが、この問題は、今度の論文でも未解決のようである。

第三章の第3論文である D. T. Kresge の "Price and Output: A Modified approach" は重要である。もともと Brookings の 1965 年モデルは国民所得ベースの生産量と価格を I/O 表の附加価値ベースに変換するいわゆるコンバーターを実際に作ってみせた先駆的榮譽をになっている。1965 年モデルでは Klein, Shinkai の二人が自己相関法 (Auto Regressive Correlation) を用いて強行したのだが、Kresge はこの論文では、各期ごとに価格と数量のウェイトの consistency を保つために反復相関 (iterative correlation) の方法を採用している。イギリスの Stone 等が示した RAS 法と共に、この分析の方向は I/O 表の係数の補間の手続きを大きく進歩させるであろう。

第三章の所得分布分析の章では、P. Dhrymes が労働需要関数を測定している。従来の Brookings Model では線型の生産関数から導出した労働需要関数を計測していた。Dhrymes は、CES 生産関数から導びかれる労働需要関数をモデルの中に組み込む工夫を示している。ラグを持った投資が労働生産性に影響するように設定して、Brookings Model グループの大きな業績の一つである投資ラグとの関係が陽表的に扱えるようになった。

企業所得や財産所得をはじめとする非賃金所得は、従来の Brookings Model では暫定的に外生変数として扱っていた。この部分への接近を M. D. McCarthy が行なっている。特に企業所得の決定には現行税制度と減価償却法をモデルの中に正確に組み込む必要があって、それぞれ Arrow や Jorgenson の先駆的な研究があるのだが、McCarthy の論文によってこの分野の本格的な実証分析が開始されたとみてよい。

第四章は財政部門モデルの二つの追加研究を収録している。連邦政府や州政府の税収を決定する方程式群は前の Brookings Model でも重要な内生的政策変数の

役割を果たしていた。P. Taubman は従来の Model では統計的なフィットに頼っていた税収方程式を、現実の税制度をできるだけ忠実にコピーした、定義式に近い方程式系で説明しようとしている。勿論、依然として殆んど全部回帰式に頼っているが(そして中には随分低い相関係数を得ているものもあるが)、この試みは今後当然の方向とし受け容れられるであろう。

第五章は金融部門ブロックに関する二つの対称的な論文を収録している。E. de Leeuw の論文は従来 19 本の方程式からなっていたモデルの金融市場ブロックを改めて 6 本の方程式でまとめようとしている。Leeuw は単にモデルを縮小しようとしているのではなく金融市場の現象の抽象の方法の変更を提案しているのである。反対に S. H. Goldfeld は従来の Brookings Model の弱点であった企業部門の流動性需要の理論の部分を改良するために以前よりずっと詳細なモデルを指向している。

改良された Brookings Model は前述のように方程式の数が増えて、それだけ非線型の組み合わせも複雑になって行く傾向にある。第七章では L. R. Klein と G. Fromm が条件付きの大型の行列演算を中心に、この巨大なモデルの解法を論じ、A. L. Nagar が作製した計算プログラムを用いて推定を行なっている。このモデルを用いて、第七章 (Klein) で 1964 年の減税の効果を検討するなどのシミュレーションを行なっている。1964 年の減税は、それを行なわなかった場合に比べて約 100 億ドルほど GNP を増加させ 0.5 ポイントほど失業を減ずる効果を持ったと結論している。

経済モデルの性能とその背後に置かれている仮説の最終的な検証は、モデルの予測能力を通じて行なわれるという意味で、この巨大な実験の評価は、今後の予測能力を見守らなければ下せない。けれども、Brookings Model の大きな功績は、新古典派的な原理をできる限り修正してマクロモデルの中に組み込んで来た試みであり、またモデルの改良の作業が依然として続けられている点にある。ビッグ・サイエンスとしての経済モデル分析の共同研究作業の偉大な典型であるといつてよいであろう。

鳥居泰彦

## The British Labour Movement and Industrial Relations in 1860's Centering Around the Establishment of the Trades Union Congress (1)

by Kanae Iida

The 1860's are generally called the "hibernating" period of labour movement. As was said by Friedrich Engels, they are probably the time when the spirit of the Owenism of 1830's and the Chartism of 1840's were entirely slipped from the people's mind, and the working class was picking with gratitude the bread crumbs falling from the bourgeois table of the Golden Victorian Age.

This depiction of the labour movement at that time conveys a partial truth, but it is certainly overlooking an important aspect of the labour movement when we remember that the 1860's in England and Europe were the time when some interrelated epoch-making events happened one after another, such as the International Exposition of London in 1862, the Polish struggle for independence in 1863, the International Workingmen's Association of 1864, that is, the grand inauguration convention of the First International in London. Enhancing the international spirit of solidarity to an unprecedented degree, these affairs proved very useful in the cause of labour-movement.

On the other side, the skilled artisans, led by the Junta, which had been formed by such persons of the national craft unions, as George Odger, Robert Applegarth, Edwin Coulson, Daniel Guile and William Allan, directed the labour movement controlling over labor market and effectively maintaining the high wage policy.

Surveying the labour movement of England like this, we recall the remark rightly said by Engels that the labour class of England was a "labour aristocracy".

The labour movement as described above embraced the all sorts of internal contradictions. For example, in spite of the fact that the labour movement should be treated as none but a *de facto* legal affair, not only the Trade Union Act was not enacted, but it was largely affected by the dictate of the so-called Master and Servant Act, and the labour disputes were carried under its restrictions.

As a result of the downfall of the Chartist Movement in 1848, the manhood suffrage was denied to labour. As late as 1867 it was granted, but it was limited only to the household suffrage.

Under such a limited condition of human right, the Trades Councils were set up all over the